

# 萌えの何こう側

小倉 一純

工場萌えの女子たちは、ただ単に工場群の夜景がきれいだから、惹<sup>ひ</sup>かれているのではないと思う。

工場にある建物はふつう「建屋<sup>たてや</sup>」と呼ばれている。その建屋の屋根や外壁などはスレートの波板でできている。石膏ボードに近い感じの素材だ。それに経年の汚れが染<sup>たたず</sup>みついて、なんともいえず地味な佇<sup>たたず</sup>まいである。

家電やクルマや一般住宅のような、カラフルさや派手さはない。流行を追いかけるなどというマインドも少しもない。

工場というのは質実剛健だ。生産現場だから、コストをとっても重要視する。女性のおしゃれ感覚とは程遠い世界だ。

どんな新しい物を作っている工場も、昔のままの外観である。まるで昭和時代の遺物のようだ。

工場は実は社会主義である。従業員たちは皆、労働組合に所属し、春闘で労働者の権利を勝ちとる。

資本主義の日本社会において、工場の中だけは、マルクス主義の世界観に裏打ちされている。

そんな諸々の違和感が、工場萌えの女子たちの心に映ばえるのではないだろうか。

彼女たちは意識していないかもしれないが、工場に数多あまたある饒舌じょうぜつな夜間照明の向こう側のそんな違和感こそ、彼女たちの萌えの核心なのかもしれない。

僕はかつて大学を卒業して、工場に配属となったが、当時は工場のそんな違和感に戸惑い、中々馴染むことができなかった。

だが強烈な印象を放つものには、時を経るに従い、良きにつけ悪しきにつけ、愛着を持つものらしい。

今では僕はそんな工場が好きで堪らない。